

皆さん、お元気ですか。

私は財団法人霞山会東亜学院日本語学校教頭、垂井進です。

これから定期的に日本語の勉強についてお話していきたいと思います。

第一回は「教科書の日本語について」です。

私はよく学生から「どうして、学校で勉強している日本語とドラマや映画で話されている日本語は違うのですか。私はドラマや映画の日本語が勉強したいです。とってもおしゃれで、カッコいい感じがしますから」と言われることがあります。そんな時、私は皆さんに「学校で勉強している日本語、教科書の日本語は、皆さんにとって一番安全な日本語なんですよ」と答えるようにしています。

日本語は話す対象、話す時の状況、話す時の気持ちによって変化することは知っていますか。例えば、中国語の「再見」、親しい友達には「バイバイ」「じゃあね」「じゃあ、また」ですが、あまり親しくない知人などには「さようなら」、また、学校の先生や上司などには「失礼します」ですよね。例えば、次のような状況を考えてみてください。Aさんの奥さんは、家では奥さんですが、会社に行ったら上司です。家にいる時、Aさんは奥さんに友達のように「ねえ、明日どこに行く」と言えますが、会社では「社長、明日はどちらにいらっしゃいますか」と言わなければなりません。同じ人が同じ対象に同じ内容について話すのに、話し方を変えなければならないのはなぜでしょう。

よく日本語の「敬語」は目上の人、尊敬している人に使うという人がいますが、実は地位や年齢ばかりではなく、話す人と対象との距離（心の距離です）に関係があるのです。つまり、距離が遠ければ遠いほど丁寧になっていくのです。つまり、Aさんと奥さんの距離は状況によって変わっているということです。仲のいい友達でも、けんかをしたら距離が遠くなる場合がありますが、それと同じようなものです。

この距離をどうやって把握するかは日本人にとっても簡単ではありません。ましてや日本語を勉強している皆さんにとっては本当に難しいことでしょう。実際、距離の把握の仕方を間違えて、近すぎたり、遠すぎたりしても非常に失礼になるのです。

ですから、学校で勉強する教科書の日本語が非常に大切なのです。教科書の中の日本語は、遠すぎず、近すぎず、一番安全な距離で使う言葉だからです。

皆さん、まず、教科書の日本語をしっかりと身につけてください。そして、その日本語が十分使いこなせるようになったら、次のステップとして、話す対象との距離を把握して、その場に応じた使い分けができるようになってください。

ただ、話すことと聞いて分かることは別です。時間がある限り日本のドラマ、映画、アニメなどを見て、どんどん聴力を鍛えてください。聴解力とはとにかく聞けば聞くほど向上するものですから。

では、皆さん、日本語の勉強頑張ってくださいね。